

中国地方の神楽に於ける託宣——神がかり——

の詞章及び神樂歌について

牛尾三千夫

中国地方には式年の神楽に、託宣——神がかりの行なわれる処がある。地にあつたが、近年次第に行なわれなくなつた。それには色々理由があるが、農村から青年が都市に出て行くことと、今一つ重要な問題は完全なる潔斎が出来なくなつたということである。現今では一週間潔斎すると云うことは仲々のことである。山口県岩国市の「行波の神舞」では、明治年間に桂松に登る荒神になり者は三週間の潔斎をしたと云われる。このような次第で今後は神がかり託宣神事が見られると云うことは、非常に珍しい稀なことになるであろうと思われる。

さてこれまで私が見た託宣——神がかりに就いて、併せてその詞章・神樂歌をも取上げてお詫申上げることと致したい。

一 名荷神楽（十二神祇系）の御縄神事

安芸豊田郡瀬戸田町名荷の荒神社の式年祭に行なわれる名荷神樂の「御縄神事」は、藁人形によつて神託を窺うものである。神託に用いる御縄の人形は、顔手足を藁で作り、頭にタコロバチの笠をかぶらせ、赤紙を下に白奉書を上に着せ、抱き名荷の紋が描かれ、右足に瘤を作りその瘤を強く引くと、人形は十尋の長さの一本の綱となる仕掛けとなつてゐる。

御縄神事は舞人の酌取りが藁人形を三宝に載せて舞殿の中央に出る。他の一人が神託幣を奉じて対座する。酌取りが人形の頭に少し酒を注ぐと、二人はゲゲと称するわらじ用のものをはいて、背後の荒神社へ参拝して人形を供へる。舞殿に坂つて来ると今度は次々に三宝の上の入形に酒を注ぎかける。酌取りは人形の手足を少しづつ踊らせる。機を見て再度荒神社へ参る。帰ると同様の所作を行なう。かくすること三回にして舞殿に帰ると、雌方は次の神樂歌に合せて次第に太鼓の調子を早めてゆく。

「酒々と、呼べと答えず、買に行かんが、道が遠いか、宵に造りて、夜中に添いかけ、曉家淨して、今盛る酒は、御斎のから酒、爰は和泉ぞ、汲み上げて盛れ。

次々と人々出でて酒を注ぐので、人形の下着の赤紙が白紙に赤くにじんで来る。ここで離子方は七音で畳んだ神樂歌を太鼓の調子を早め乍ら歌うと、人形は恰も生あるものの如く手足を動かして踊る。神樂歌三唱して終ると人形の動きが止る。下着の赤き色の上着の白奉書に染つた滲み具合によつて神託を窺い知るのである。終ると酌取りと幣方二人腰に太刀をさして立ち、機を見て人形の瘤を強く両方に引くと一本の綱となる。東西の柱に引き延して太刀を抜きて、「ウロコウチ」の古儀により綱を両断して終る。

この後に「妙見三神御神託」が行なわれていたが今は中絶した。

本土側の三原市附近では今も十三年に一度の妙見神楽が同族によつて行なわれている。一族の株頭に伝えられている名剣を祀つて前夜から翌日にかけて、花揃へ・造花・御神託・布くぐりの神事が行なわれる。妙見三神御神託には、熊野の本地を説き、花揃への歌を歌つて後、剣の本地を長地にて誦すれば、願主久米を乞い、舞殿の大回りに引きたる白布の輪の中に入ると、

『やさいや、王子の馬の手綱は、綾の丸ぐけ、大願解くも法の神子、小願解くも法の神子』

と三度繰返し歌うと、太鼓方より

『ゆら／＼と、神舞上る松の葉に、二葉の松の雲に添うまで

神明あなたに上りまします

以上で千秋万歳となる。

二 備後府中荒神神楽の焼石神事の呪歌

備後府中地方の荒神神楽も七年目毎に行なれ、次の八番の曲目が特に重要視せられる。

手草・剣舞・折敷舞・惡魔払・造花・龍神・布舞・焼石神事

焼石神事は、一人淨衣姿で神前に出で、五方拝を舞う。終つて淨衣を脱ぎ神前に着座すると河原石を数時間斎灯の中で焼きたるもの台石の側に運ぶ。太鼓に合わせて火防せの印を結び、次の神歌を誦す。

『猿沢の池の蛇のふく息ははげしき火もうちしめるなり

へぎたかたや南に通うかんきさい丸なる中の寒の水かな

へ霜柱氷の針に雪の桁天の垂木に露のふき草

次に水の印を結んで、右手に神酒を持って焼石に注ぎ、次に左手

に塩をつかんで焼石に振りかける。かくして呪言を誦しながら焼石を両手に抱えて、起つて頭上に差上げ全力をこめて台座の石に投げ打つ。焼石の多く碎けたるを以て神威の感應を占う。まことに神秘の一瞬時である。所要時間十五分。

最終の焼石神事は、往昔から神樂人泣かせと云われ、現在これの行える人は府中市の六十歳を過ぎた道下太郎氏只一人である。氏の話では焼石に両手をかけるまでは意識しているが、それ以後焼石を投げ終るまでは無意識だと云われた。

焼石神事の神樂歌は、早池峯の大賀神樂や三沢の花祭などに類歌がある。

三 阿刀神樂(十二神祇系)の荒平の言立

広島市沼田町阿刀部落で秋祭りに行なわれる神樂であるが、最終に荒平と將軍が舞われる。ここでは荒平のことを「せぎの舞」とも云い、各地で鬼返・柴鬼神・神明の舞などと呼称せられるものと同じもので最も古い詞章は、安芸山県郡千代田町王生の杜家井上就吉氏蔵の「天正十六年荒平舞詞」である。この舞に出て来る鬼は悪い鬼ではなく、山より下りて来るストレンジャーで、山づとの杖を携へるものである。その詞章は、

『あーら、この杖を持つて、四方八方を、打ちなづれば、万の宝

が、皆寄り来る也

へまーた、この杖を持つて、老いたる者の、顔をなづれば、十七八に若やぎ、この杖を持つて、死したる者を、なづれば、生き返るなり。

是も皆杖の因縁なり

へあーら、この杖を汝にとらせるぞ、よき蔵の下積みにせよ
この荒平の詞章は大体八音に疊んで力強く发声する處に特徴がある。

そして最終の言葉として、田植草紙の朝歌四番の、

へ朝はか行くや、御前^{アマサ}、取り苗を植ゑてな

秋刈り入れて、蔵の下積みに

早い稻やれ、植ゑれば先から穂乱れ

稻のなびきは、御蔵へさらりなびいた

蔵の下積み、今年のいねの種子にせう

この歌と通じるものがある。

將軍舞は、將軍と太夫二人出で、鈴と幣、次に鈴と刀、次に鈴と

弓で舞い、次に將軍は刀、太夫は弓で舞い、その弓を張つて將軍を

潜らせる。次第に太鼓を早めて激しく潜らせ、最後に將軍にその弓

を渡すと、將軍は中央の白蓋に取り付けたる重り米を矢で射ると、

忽ち神懸りするのである。

周防玖珂郡地方や石見鹿足郡地方には河内神の式年に山^ベ神樂が

行われ、多くは十二神祇系のもので、將軍舞に神がかりが行われて

來たが、最近は神がかりすると短命だと云われて、形式だけのものになりつつある。

四 大元神樂の御綱祭の唱言

石見邑智郡及び那賀郡の一部に行われて來た、大元神樂の託宣神事については、これまで何回となく繰返して書いたので、茲では綱貫（注連起しとも云う）及び御綱祭の唱言のみを記すこととする。神がかりの方法には三種類があるが、その一つ藁製の龍蛇を引延へてその中に託太夫を入れて神殿の中を神歌を誦し乍ら太鼓の調子を

次第に早めて、神の憑く場合のことを述べると、花取りの神職以下十数人龍蛇を小腋に挿んで舞殿へ出て来ると、太鼓方から次の歌を出すと、神職下句を反唱する。

へ夜明けをば鶴の羽干しさも似たり

夜は元白になるぞうれしき

へこの御座に参る心は山の端に

月待ち得たる心地こそそれ

へ注連の内まだ降りまぬ神あらば

こがねの注連を越えてましませ

へこの村に悪魔は寄せじ魔は寄せじ

寄せしが故に神を請じる

へ東青南は赤く西白に

北黒中は黄なりとぞ云う

へみさき山下りつ上りつ石すりに

袴が破れて着替へ給はれ

へ静かまれ静かまれよと池の水

波なき池におしどりぞ住む

みさき山の歌をはげしく歌うと、大低の場合神がかりするものである。神がかりすると「静かまれ」の神歌を誦し乍ら四方へ向つて

打米をし、腰抱き役は託太夫の腰を抱き、すかさず御綱は東西の柱に引き延へる。そして御綱の中央に託太夫を連れ行き、白木綿で託

太夫の首を天蓋に結びつけて暴れないよう所置する。次斎主は神名帳によつて部落内の神々を勧請する。太鼓に合せて斎主より、

へ先づ以つて、招き奉り斎ひ奉る、この里の大元大明神の、幸魂

奇魂、今宵ぞ^{カク}育く

これを受けて神職一同御綱を振り乍ら

「今年の今月」、この日のこの時」、神樂の斎庭で」、神遊びせう」

右の神歌を四音に疊んで反唱する。

「細野一利が」、斎き奉る」、地主の神の」、幸魂奇魂」、今宵ぞ

く」

「今年の今月」、この日のこの時」、神樂の斎庭で」、神遊びせう」

神勧請が終ると、託太夫から御神託をお伺いする。作柄ら、火難水難、部落内の諸問題を、氏子總代一人託太夫と向い合って勧請幣をかざして誘導訊問の形でお伺いする。現在中国地方の託宣神事では神がかりはするが、託太夫より神の声を直接聞かれる処は大元神樂だけである。其他は米占などによって神意を伺うにとどまつてい

る。託宣が終ると次の神樂歌を歌う。

「静がまれ、静がまれよと、池の水

波なき池に、おしどりぞ悽む

「あらうれし、あらようこばし、これやこの舞い奉る、栄えまし

ませ

「しづやしづ 静の小田巻、繰り返し

昔を今に なすよしもがな

神占が終ると、太鼓より

「末結ぶ、静の小田巻、繰りもどし

昔を今に なすよしもがな

終ると元山の山俵の下へ斎主以下列座して、大祓を奏上して、斎主、天下泰平・五穀豊穣・村民安泰・千秋万々歳と大唱して成就神樂となる。

五 荒神々樂

荒神々神は、備後、備中地方に行われてゐる神樂で、その中でも備後東城地方で行われる三十三年目の大神樂は、以前は前神樂・本神樂・灰神樂と、四日四夜を通した祖靈加入の儀式の神樂であった。今では三日二夜となり、二日一夜と短縮され、最終の灰神樂も稀々にしか行われなくなつたが、凡そその往昔の姿だけは伝承されている。

初日 神職参集、当屋淨め、竈さらえ、荒神迎え

初夜

七座神事

土公神遊び

二日

小神遊び

二日夜

七座神事

荒神遊び

三日

神殿淨め

神殿移り

四日

五行舞

龍押し

荒神の舞納め

神送り

四日夜

竈遊び

死後三十三年を経た靈魂は、前神樂にはまた拒絶されて神殿に入ることは許されない。新靈の神殿に入るを許されるのは、龍押しの後である。四日四夜の神樂を通じて、その間に土公神遊び・小神遊び・荒神遊び・荒神の舞納め・竈遊びと、五度の神遊びが行われる。その内前神樂の荒神遊びと、本神樂の荒神の舞納めは託太夫（神柱とも云う）による神がかりがある。この神がかりのものすごさは実際に拝観した者でないとわからぬだろう。青竹を握につぶしてしまふ程である。

儀て、土公神遊びと、小神遊びとは大同小異のもので、太鼓方と判者の神職は田植太鼓を敲いて（西城町では弓を敲く）相方神樂歌

を掛け合ひ、終ると判者の神職は盆の中の米をゆすって神意を占う。

その時の歌は、

「静々と願う女夫の声きけば末の社にえこそねられん

「御久米どる取る手の内のがやきは神の移りかあらたなるもの

「よらばよれたよらばたよれ今たよれたよりみ久米に切りくまは

なし

「押し返したよらばたよれ七度までたよるみくまに罪咎はなし

「沖にすむ鴨をしどりに物問へばなにわのことは波にまかせむ

「千五百増女雄のかがみのつまごめに朝食夕食を守る神垣

「千々の世に千々の岩窟に住む虫は鳴りをしづめてよきをきけか
し

「この盆においてなほりてからくらものひんもの手中にもちまんね
きまねくまんねきまねくいやいやとんどみくらないとみく
らないと

「ゆりあぐる浜の真砂の数よりも尚よろこびは吾後世の時

龍押（綱入れ）は四日未明、王子舞が終ると朝食のお粥が出る。

少憩後一同白鉢巻白衣白袴草鞋はきで、当屋の門田に出る。門田の

四周と中央に七五三縄が張り廻らされ、中央の注連の向側に本山荒

神勢の神職数名、三、四尺の青竹の荒神幣を持って待ちかまえてい

る。一方新靈の龍蛇は龍頭幣を持った神職三、四名と、荒神下の氏

子金貢して、勢さまじく太鼓の調子につれて門田に入つて来る。

中央の注連に近づくと蛇側の外と本山荒神側の内と次のような問答

が交される。

外「国遠く雲井遙かにへだたりてわが来にけるは神垣の内 案

内申す宮の内 仔細たづねる神殿の内

内「一切も不思議なるかなや、今朝の夜の明け方に丑寅口を見ま

いらせ候へば、さもすさまじき蛇体の姿にて、角のあたりを見給へば高山に古木の立ちたるが如くなり。眼のかかりを見給へば大磐石に鏡を懸けたるが如くなり、口のかかりを見給へば馬洗にさしたるが如くなり、斯る姿にて案内仔細と宣ふは如何なる者にて候かな

外「さん候 かようには候者は、山川大海を住家として衆生の苦しみを逃れたく候へ共その業もなし、山に千年住ひ候節は楠のかぶたと現じ、山神大王に官仕へ候へ共鱗一つだに落つべきようもなし、川に千年住ひ候節は海老の巢と現じ、水神大王に官仕へ候へ共鱗一つだに落つべきよもなし、海に千年住ひ候節はあらめの株木と現じ、龍神大王に官仕へ候へ共鱗一つだに落つべきよもなし、此度〇〇名元山三宝荒神の三十三年御綱入れ大神事ありと承り、遙々参りて候が何卒神殿の内に入れ官仕へ致させ給へや

内「さればにて候 山に千年川に千年海に千年の齡を保ちたる行体にて遙々尋ね参り候ものなれば、元山荒神の由来を細ざに語り候へ、然らば神殿の内に入れ申さん

外「されば仰には候へ共、素より蛇性の事なれば左様なることを委細に知るべきようは候はねども、あらあら語り申さん、抑々荒神と申すは、水火土の大徳を祭り申するよし承りて候、總じて天荒神、地荒神、三宝荒神、臍結荒神、湯荒神、午王荒神、火荒神、竈荒神、などと申すよし承りて候、是にて神殿の内へ入れ給へやの

内「なかなかのことにて候、たやすく神殿の内に入れ難し、四季の歌を詠じ給へ、然らば入れ申さん

外「蛇性のことなれば、かかる歌を知るべき様もなし、早々入

れ給へ

内「然らば上の句を詠じ申さん、下の句をつけ給へ

内「春三月柳桜に藤の花

外「雉子鶯ひばり轉ずる

内「夏三月卯花橘撫子に

外「山時鳥つゆの鶴の鳥

内「秋三月咲く女郎花に萩の花

外「まつかりがねにうづらさえずる

内「冬三月寒菊枇杷に梅の花

外「鶴啼きわたるかもめをしどり

内「四土用の立つ間も知らでことはき

外「調べて通る浜千鳥かな

内「東青南は赤く西白で

外「北黒中は黄なりとぞいふ

これらの歌の応答後、外よりオーと叫んで七五三内に入らんとする。内より太刀にて七五三を切り、黄金の注連を越えてましませの

歌を双方連誦して、龍蛇は注連内になだれ込み、荒神勢を追いまくり捕えて薙蛇を巻き付ける。晚秋初冬の時には風花の散り交う苗代田での龍押の風景は実に美しく感銘深いものである。龍押が終ると神殿の東西の柱に龍蛇を引き延べて鱗打の行事がある。ここで新靈の龍蛇は清まって祖靈に加入する資格を得ることになるのである。

以上これまでに見て来たように、託宣一神がかりに追い込むためには、託太夫自身の完全なる潔斎と、妙へなる太鼓の打ち方に係わっている。太鼓は静かに始めて、次第に調子を上げてゆき、最後に至つて瞬時の急テンポの繰返しを必要とする。そのためには神楽の詞章も太鼓に合せて歌わなければならぬから、長音の繰返しから次第に短音の繰返しに変化して行くことが肝要である。今の時代太鼓の打てる人が次第にいなくなることも、神楽の神秘性を失つてゆく原因の一つとも云えようし、託宣一神がかりの問題が今後どのようになりゆくものか、私など神楽に参与しているものには大きなる氣懸りのことである。

(うしお みちお・島根県邑智郡桜江町市山飯尾山八幡宮々司)